がすけて見えるのです。大体血管が発生するのが３～５日目なので、私は３日目に検卵をしました。しかしこの時点でどの卵にも血管は見えませんでした。一応まだ早かったということで様子見を続けます。そして５日目の検卵の時、２つの卵に血管のようなものがすけて見えました。他の見えない卵は腐ると内側から圧力がかかって爆発するらしいので、危ないかなと思いつつもゆで卵にしておいしく頂きました。後は有精卵ぽかった２つの卵を管理するだけなのでだいぶ楽になりました。そして何事もなく２週間が過ぎ、卵の中はヒナの形が完全に分かるほどに成長していました。この時点で転卵をやめ、孵化を待ちます。ここで感動したのは、卵を机や床のような平らな場所に置くと、かすかに動くことです。１つはよく動くのですが、もう１つは全く動かず、心配だな、と思っていたのですが、次の日バイト前に発泡スチロールを見てみると、卵が真っ二つに割れていました。驚いた私は、発泡スチロールの中を探してみると、タオルの中に、ペットボトルのキャップくらいの大きさの毛玉のようなものがあるのに気付きました。それは触ると動いて起き上がりました。うずらのヒナでした。まさか孵化予定日より２日も早いのに生まれてはいないと思っていたので、かなりびっくりしました。しかも生まれたのは全く動かなかった方の卵だったのです。このうずらはすぐに別の容器に移し、ひよこ電球で保温しました。そして、もう１つも楽しみに待っていましたが、なぜか孵化することなく卵の中で死んでしまいました。とても悲しかったです。

このような突然の思いつきから始めたうずらの孵化ですが、想像以上にいい経験になったと思います。生まれたうずらは、うーちゃんという名前をつけられて今も私の部屋の中を元気に走りまわっています。

## 〈詫間キャンパス　読書感想文〉

**最優秀**

### 『わたしはマララ　教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』を読んで

電子システム工学科３年　勝田 稚菜

昨年、史上最年少の十七歳でノーベル平和賞を受賞した「マララ・ユスフザイ」という少女を知ったのはテレビのニュースだったと思う。そのニュースを見て、彼女が私と同い年ということに驚いたのを覚えている。

私が今回読んだのはその少女の自伝である。この本を手に取った時、表紙に写った彼女のまっすぐこちらを見ている瞳が印象的だった。この本が発売されたのは、彼女が十六歳、私が高専１年の冬である。私と同じくらいしか生きていない少女に四二九ページにも及ぶ自伝が書けるのか不思議だった。でも、その理由は本を読めば分かった。彼女の人生は私の人生とは大きく異なり、私の想像を絶するものだった。十六歳とは思えない彼女の言葉で書かれているのはパキスタンの“現実”だった。文章から彼女の訴え、思いが直接私の心に伝わってくるようだった。私は、この本をすらすらと読むことはできなかった。何度も読むのを止め、また読み始める。これを繰り返しながら読み進めていった。

彼女、マララが生まれたのは、パキスタンのスワートというところである。この国では今までに反政府武装勢力・タリバンによって学校が破壊され、罪のない人々が捕らえられ殺されるということが実際に起こっている。中でも少女たちは教育を受ける権利、職業選択の自由を奪われ、児童婚を強いられる。恋をすることさえも許されないのである。私はこの現実を知ってはいたが、体験談として書かれた文章を読み、向き合ってみると、今の自分が生きている環境がどれほど恵まれているのか、幸せであるのかを思い知らされた。

この本の中でとても印象に残っている言葉がある。
「世の中にはいろんなものを怖がる人がいる。幽霊が怖いとか、クモが怖いとか、ヘビが怖いとか。あの頃のわたしたちは、人間が怖かった。」
この言葉は彼女がタリバンの命令に反抗し、隠れて学校に通っていた十一歳の時の思いを表したものである。少女たちは学校に通うことを禁じられ、見付かれば鞭打ちの刑にあってしまう。日本では絶対に考えられないことである。命の危険と隣り合わせで、「人間が怖い」と思いながらも、反抗し、教育を求めて声をあげ続けた彼女。私ならずっと部屋に籠もってただ怯えているだけだろう。彼女と仲間たち、教育を行った先生たちの勇気のある行動はきっと多くの人々に希望を与えたのではないだろうか。

しかし、彼女はこれらの勇気ある行動によって、本のタイトルにもあるようにタリバンの襲撃の被害に遭ってしまう。頭に銃弾を受けながらも奇跡的に一命をとりとめた彼女はその後、回復するとそれまで以上に教育のため、少女たちのために声をあげ続けたのである。命を狙われても、自らの信念のため、人々のために動く彼女の姿はとても真似できるものではない。強い意志、気持ちがあってこそできることである。彼女は本当に強い人だと思った。

この本を読んでから、ノーベル平和賞受賞の時の彼女のスピーチの映像を見た。彼女はスピーチをするのも上

手かった。時にジョークや身振り手振りを交えながら、中等教育の必要性や少女たちの権利を訴える姿は同い年の少女とは思えなかった。喋り下手といわれ、文章を書くのも苦手な私からすれば羨ましい限りである。スピーチでの言葉一つ一つからも彼女の思いが伝わってきて、やっぱり色んなことを考えさせられた。素直でまっすぐな言葉はきっと多くの人の心に響いたと思う。

彼女が十六歳の誕生日にニューヨークの国連本部で行ったスピーチの一部にこんな言葉がある。

「ひとりの子ども、ひとりの教師、一冊の本、そして一本のペンが、世界を変えるのです」

私は、何も知らないこと、無知ほど恐ろしいものはないと思う。教え、教わり，学ぶこと。教育は平和を築いていく上で最も重要なものではないだろうか。

今回、この本を読んで、私はもっと世界の出来事に目を向けるべきだと感じた。まずは、知ることから初めてみようと思う。そして、「マララ・ユスフザイ」という少女を知ることができて良かった。私も彼女のように意志の強い人になりたい。勇気のある人になりたい。まっすぐで美しい人になりたい。あとできれば、喋り上手にもなりたい。マララの生き方を真似することはできないけれど、彼女の思いは心の内で覚えておこうと思う。

『わたしはマララ　教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』
マララ・ユスフザイ　著
クリスティーナ・ラム　著
金原瑞人＋西田佳子　訳
学研パブリッシング

**優　秀**

## 「自分」の壁

電子システム工学科３年　**岩崎 友里亜**

「個性を大切にしなさい。」というような、「個性」を重要視する発言を私はこれまで生きてきた中でたくさん耳にしてきた。これは私だけではなく多くの人が今まで耳にしてきた言葉ではないかと思う。みんなと同じではない、自分だけにしかない良いところを私たちは今もなお探し続けている。就職のために、あるいは大学受験のために。今までそう教わってきたのであるから、そのことに対し多くの人が疑問には思わないだろうし、私自身も疑問に思ったことなどなかった。しかしこの本を読んで私の個性に対する考えが百八十度変わったのであった。

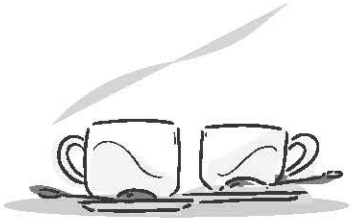
この本を読んでいて、私がとても衝撃的だったものは、筆者の「個性は世間と折り合うことによって見つけられるものである」という考え方である。私たちは今まで個性ばかりを重視していて、個性以外のもの、すなわち世間との協調性について全く目を向けてこなかった。個性とはその人が持っている元々の素質のことである。つまり、個性は自ら探さなくても周りに合わせていると見えてくるものなのだ。世間に折り合うように努力しているにも関わらず、尚且つ折り合えない部分がでてくる、それが個性なのである。「個性を見つけるために自分自身を見直しなさい。」というようなことは何度も言われたことがある。しかし、「個性を見つけるために世間との折り合いを大切にしなさい。」とは、私は今まで誰一人の口からも聞いたことなどなかった。世間に合わせることが必然的に個性を発見することに繋がるということに、初めて気づかされた。

最近は自分のことばかり考えていて、周りに迷惑をかけているような人を多く目にする。これは、現代社会が個性を重要視しすぎているということが関係しているように感じられる。個性ばかり、自分ばかりを見すぎていて回りのことが見えないというのが、現状である。世間との折り合いを大切にするということは、自分のことばかり考えるのではなく、周りの人のことにもっと目を向けるということと同じなのではないだろうか。

将来エンジニアになるであろう私たちは、学校をはじめ、多くの企業から「オリジナリティ」を求められている。つまり「個性」という問題から距離をとることはほぼ不可能であるということだ。しかし、だからといって迷って自分探しをはじめることはない。世間に合わせることで、世間にもっと目を向けることで、自分自身は見えてくるものなのだ。

この本を読むことで、今まで私たちが大切にしてきた「個性」よりも、もっと根本的なものである「世間」という存在に気づくことができた。人と違うところを探すのではなく、人と同じところを探すというのがこれからの課題である。自分探しをしているあなたに、履歴書の自己ＰＲ欄に書く内容について悩んでいるあなたに、是非考えてもらいたい内容である。

『「自分」の壁』　養老孟司 著　新潮社



優　秀

## 一人の小さな研究家が信じて走る道

1年7組　河田 莉捺

しんどくなったら静かな夜空を眺めればいい。私はどんなときでも空を見上げる心の余裕をもって生きたいと思っている。

人間は追いつめられるとどうしても視界が狭くなってしまう。壮大な宇宙の神秘を感じてみれば心地よい大きな流れに身を任せるように、いくらか気分も落ち着くものだ。

アオヤマ君と同じように私も宇宙の神秘の虜であった。そして、昔も今も私はキラキラしていて不思議な話が大好きだ。

私とこの本との出会いは私が中学三年生のときだ。当時放送部に所属していた私は、コンテストでこの本の二人が会話をしている何気ないワンシーンを選び、朗読したのだ。複数の指定作品の中のひとつだったが、最初なんとなく手にとったこの本の世界に私はどんどん惹きこまれていった。

ある日突然、街の空き地にペンギンの群れが現れた。この本は謎だらけである。そして鮮やかでリズムのある表現や動作によってさらにその不思議さが増す。

お姉さんの手から離れたコーラの缶が宙を舞ううちにペンギンになったとき。お姉さんの差す緑色の傘からツルクサが勢いよく伸びて枯れて、またペンギンが生まれたとき。それらの幻想的な一連の流れを脳内で思い浮かべてみると、ゾワゾワとした感覚が走った。お姉さんはペンギンを生み出すことができたのだ。そんな謎だらけのお姉さんと、お姉さんの謎を研究する少年の二人のシーンが私のお気に入りである。

そのコンテストではなかなかの結果を残すことができた。自分でも読んでいてとても楽しかったし、録音して聞いては改善し、自分が納得いくまで試行錯誤して完成させた。その気持ちと努力が実を結んだのではないかと思う。

アオヤマ君は勤勉でひたむきな努力家であった。小学四年生とは思えないほどの知識と大人びた考えを持っている。年齢を思わせない口調に、彼がまだ小学生なのだということを忘れてしまうほどだ。何度もハッとしてそれを思い出す。けれどお姉さんはいつも彼のことを、まだまだガキンチョの「少年」と呼んだ。

ついにお姉さんとの別れの時がやって来てもアオヤマ君は泣かなかった。お姉さんも笑っていた。あっさりとした別れに私は何とも言えない気持ちになった。やはりアオヤマ君はとても強くて立派な大人だ。

研究熱心で真面目なアオヤマ君は、ペンギン・ハイウェイを走り続ける。そうすればまたお姉さんに会えると信じているし、私もまたそうであってほしいと願っている。努力は実を結ぶ。そしてきっといつか宇宙にも行くのだろう。

大人になった彼を見ても「少年」と、お姉さんはあの時と変わらない笑顔で彼をそう呼ぶのだと私は思う。

だが、人生という道はひたすら走るべきなのだろうか。私は時には立ち止まって振り返ることも大切だと考えている。ゆっくりと歩きながら周りの景色を眺めるのも面白いではないか。

もしかしたらその機会は訪れないかもしれないが、ひたすら走って疲れたときは空を見上げることをアオヤマ君にも是非おすすめしたいものだ。

『ペンギン・ハイウェイ』　森見登美彦 著　角川書店

佳　作

## 「阪急電車」

通信ネットワーク工学科3年　旭 瑞歩

このお話は阪急電車の中でも全国的知名度の低いであろう片道十五分のローカル線「今津線」を主人公として、乗り合わせただけの乗客の人生が少しずつ交差し、恋の始まりや別れの兆しなど、希望のものがたりを紡ぐ人数分のドラマを乗せて走る電車での出来事を描いたほっこり胸キュンな気分になる物語です。

まず物語は西宮北口方面行きの電車から始まります。このお話は目次を見ると分かるのですが、章ごとの題名が駅名になっています。そして宝塚駅から西宮北口までのお話が終わると折り返しがあって、また宝塚駅に戻ってくるように物語が構成されています。その構成がとても面白く、読んでいて引き込まれる構成だなと思いました。この作品は先程書いた様に阪急電車今津が主人公として書かれているので、特定の人物が主人公ではありません。だから登場人物全員が主人公のように感じました。なぜならこの物語は章ごとに主人公というか、視点が変わるからです。駅ごとに視点となる人物が変わり、物語を色んな方向から見ることができとても新鮮でした。例えば前の駅では老婦人目線で語られていたのが、次の駅では元恋人の結婚式にウエディングドレスで乗り込んだ女性の目線で文章が書かれていました。また登場人物はそれぞれ皆、物語のどこかで関わりがあり、絡みがあるので一人の人物をいろんな人がそれぞれ見ていて、その

様子が語られるのがとても面白かったです。この本は映画化もされていて予告編を見たことがあったのですが、主人公はウエディングドレスの女性だと思っていただけに余計に面白く感じたのかもしれません。

次に話の内容ですが、本当に日常に起こるような事がいっぱいあって、私は読んでいて「あー、こういうことあるある。」と思いながら読んでいました。また登場人物同士での絡みでは、時江おばあちゃんの短くても深い言葉が好きでした。短くても重みがあって、言葉ってこんな使い方もできるんだなと思いました。また、話の随所に思わずクスッと笑ってしまう内容が多いことから、私は西宮北口行きの逆瀬駅のお話しが一番好きでした。

最後にこのお話を読んで一番思ったことは、人と人との出会いというのはとても不思議だなということです。このお話の中では何人もの登場人物が出会った人と互いに影響し合い、それぞれの運命を変えていきます。このお話を読んでいると、私も日常でいろんな人と関わり接することで人生においての選択をしているのかなと少し考えさせられました。だから人との関わりというのは大切にしなければいけないなと思いました。

このお話は読んでいてとてもほっこりしたり思わず笑ってしまったりする内容で、読み進めるにつれてどんどん楽しく読める本です。この本を読んで阪神電車に乗ってみたくなったし、久しぶりに宝塚劇場にも行きたいという欲が出てくるほど私に影響を与えてくれました。こんなに読んでいて安心する本はないと思います。また、解説は生前ドラマや映画で活躍されていた児玉清さんが書いているので、そこも見どころだなと思いました。この本は読んで損することはないと思うので、是非いろんな人に読んでみてほしいです。

『阪急電車』 有川　浩 著　幻冬舎文庫

# 教員によるエッセイ

## 『書庫の魅力』

建設環境工学科
**今岡 芳子**

今年の夏休み、私の受け持つ測量学のレポートの中に「図書館に行って調べて書きなさい」という課題を課していました。すると何人かの学生が、「市の図書館に行ったけどありませんでした。」と言ってきました。灯台下暗しという言葉が当てはまるかはわかりませんが、私は測量の本がたくさんある、本校の図書館をイメージして、この一文を書いていたために、とても驚きました。「いやいや、学校の図書館にあるよ。」と学生に伝えると、「そうなんですか？」と驚いた学生の様子に、更に驚いた私。学校の図書館に足を踏み入れる機会って、そんなに無いのかなと、少し寂しくなりました。

では、私が学生時代は足を踏み入れていたのか！？ということなのですが、毎日のように遊びに行っていました。しかも図書館の奥深く、書庫に。図書館の書庫って入ったことがありますか？書庫に入ったことがある方はご存知かと思いますが、書庫に足を踏み入れると、違う世界に来てしまったのかなと思うような静けさと、大量の本に囲まれる圧迫感、ひんやりした空気、独特な匂いを感じます。何より、自分が興味のないと思っていたような本たちとの出会い。私はこれが楽しみで、遊びに行っていたのです。静かに眠っていた本をたたき起こすこともしばしば。毎日、不思議な本たちと出会っていました。インパクト大だったのは、「死」という写真集。題名を見たときに「え？」と思い、ついつい手にとってしまいました。この写真集は、ニホンジカが亡くなって白骨化するまでが収められたもので、直視できないような写真もありました。しかし、生命のつながりを感じさせるものでした。このほかにも、何十年も前に発行された雑誌も面白く、「○○年後を大胆予測！」なんて記事を読んでみると、その予測が残念なことに外れていたりして、時代背景の違いなどを感じていました。まさしく、この記事の雑誌などは、「起こさないでよ！」と思っていたに違いありません。

久しぶりに、裏舞台のかっこいい彼らに会いに行きたくなりました。なお、本校の書庫は、教職員が一緒だと入れます。図書館だけでなく、裏側にも足を運んでみてください。

# 教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。

## 教 員〈高松〉

### 世界の音楽大図鑑

▶ロバート・ジーグラー（著）〈河出書房新社〉

さすがスミソニアン、と思わせてしまう、文字通りの「世界の」音楽「大図鑑」。
近代のヨーロッパの音楽に多くのページ数が割かれているのはやむを得ないところだろうが、それでも紀元前６万年から現代まで（！）、ヨーロッパ、南米、アジア、アフリカと世界中の音楽にきちんと目が配られている。驚いたことにAKBも載っているらしい。

実際の音が聞けないのが残念でならないが、この中のいくらかは図書館にもCDが入っています。さあ、この世界には、あなたのまだ知らない素晴らしい音楽がいっぱいある。ちょっとブラウズしてみませんか？
そして、本校の学生さんにとっては、川端先生が翻訳に加わっておられるというのがちょっと嬉しいボーナスですね。

一般教育科教員　高橋 宏明

### ヒマラヤ聖者の太陽になる言葉

▶相川 圭子〈河出書房新社〉

「スピリチュアル」とか「精神世界」と聞くとどこか怪しいと感じたり胡散臭く思う人も多いと思います。私もどちらかといえば懐疑的です。本書を読み進める時は、宗教や瞑想といったキーワードは気にせずに、自分にとって気持のいい言葉、少しでも気持ちが楽になる言葉を探しながら読み進めるといいと思います。気持ちの持ち方ひとつで日々の過ごし方が変えられるのであれば試してみてもいいのではないでしょうか。

いつも何かに追われて疲れている人、将来に対して漠然とした不安を抱えている人、どんな人にとっても大切な言葉が見つかるのではないかと思います。

機械工学科教員　吉永 慎一

### ヒトのなかの魚、魚のなかのヒト

▶ニール・シュービン（著）、垂水 雄二（訳）〈早川書房〉

複雑な仕組みを持つ人体、これは最初からきれいに設計されたものではない、人体の中には長い長い生命の進化の歴史が刻み込まれている。進化の中で残骸になった器官や初期の目的とは違った働きをすることになった器官、無理やり改造されたために苦し紛れに設計された器官などいろいろな器官があり、人体が形作られている。皆さんも「生命の進化」から進化とは何だろうと考えてみてはいかがでしょうか。

電気情報工学科教員　鹿間 共一

### 海賊とよばれた男(1)(2)(3)(4)(5)(6)

▶須本 壮一（著）、百田 尚樹（原著）〈講談社〉

ベストセラー「海賊とよばれた男（上）（下）、百田尚樹、講談社」のコミック版です。高専卒業生もたくさん在籍するある大企業の創業（再興）物語として、また戦後史の１ページとして、一読する価値がありそうです．コミック版は、まだ未完結なので、続きは、続編の発刊を待つもよし、また原作本や文庫本で読むもよし、ですね！。

機械電子工学科教員　平岡 延章

### 観光のユニバーサルデザイン 歴史都市と世界遺産のバリアフリー

▶秋山 鉄男、松原 悟朗、清水 政司、伊澤 岬、江守 央〈学芸出版社〉

老若男女、障がいのある人、誰もが楽しく観光したい！でも、いざ観光地に行くと階段が多い、トイレが不便・・・結果、楽しめなかったということも。観光地のユニバーサルデザイン化とは、観光地をできるだけ全ての人に使ってもらえるようにデザインしようというもの。この本では、これまで難しかった、自然遺産や歴史遺産を守りながら観光をする環境を作るという新しい視点が盛り込まれた１冊です。

建設環境工学科教員　今岡 芳子

## 学 生〈高松〉

### 白鳥異伝

▶萩原 規子〈徳間書店〉

私オススメの本は、「白鳥異伝」です。ヤマトタケル伝説がモチーフとなっていて、主人公の遠子はオトタチバナヒメ、彼女と兄弟のように育ってきた少年、小倶那はヤマトタケルがモデルになっています。遠子に守られてばかりの小倶那は強くなるために都へ行くことを決意し、「必ず戻ってくる」と約束します。しかし、大蛇の剣の力に取り憑かれた小倶那は遠子の村を滅ぼします。遠子は彼を止めるため唯一の対抗手段である勾玉を集める旅に出ます。ぜひ一度手に取ってみてください。

1年2組　堀田 優衣

### オブジェクト指向でなぜ作るのか

▶平澤 章〈日経 BP 社〉

初心者でも分かりやすい平易な文でオブジェクト指向の生まれた経緯、オブジェクト指向とは何なのか、メモリの解説、UMLなどのツールの解説、などが書かれた本です。僕は他にもいくつかオブジェクト指向の解説本を読んできたのですが、最も分かりやすいと感じました。特に言語を限定して

いないので、C++,java,Pythonなどどんな言語でも役に立つと思います。

1年4組　中野 将生

## 死ねばいいのに

▶京極 夏彦〈講談社〉

物騒なタイトルですが、同時に内容が気になる書名でもありますよね。殺人事件によって彼女を失った主人公が、ある疑問を解決するために関係者を訪ねていくというのが大まかな流れです。百鬼夜行シリーズで知られる京極氏ですが、その文章の特徴である「繊細・詳細な描写」は本作でも大いなる効果を発揮しています。主人公と登場人物の2人だけでの会話のシーンが多い本作では、心情描写が特に光ります。無駄な語句が多い、とか回りくどい、といって京極氏の文章をあまり好まない人がいるのも事実ですが、はまる人ははまると思います。ほかの書籍は「サイコロ本」と呼ばれるほど分厚いものがありますが、本書はそんなに厚くないので、京極作品デビューにはちょうどよいかもしれません（笑）　終盤で明らかになってくる「死ねばいいのに」の本意とは。ぜひ実際に読んで確かめてみてください。

機械工学科3年　冨田 想

## 翔べ!MRJ

▶杉本 要〈日刊工業新聞社〉

ある日、図書館にふらーっと出かけていくと、高専の先生が推奨している本棚のコーナーでこの本を見つけました。それはまだ誰も読んでいないくらいにきれいな本で、表紙に最近話題の国産ジェット旅客機MRJが載っていてかなりインパクトがありました。

本の内容はとてもためになるもので、日本の航空機産業の歴史や、MRJ開発の経緯などを知ることができます。そして日本人として、また高専生として、この航空機開発にはかなり意義のあるものだと感じ取ってもらえるはずです。この分野に興味がわかない方でも十分に参考になる本です。ぜひ読んでみてください。

電気情報工学科4年　今村 元紀

## バカの国

▶KAZUYA〈アイバス出版〉

改正公職選挙法が成立し、来年の参院選から18歳以上の国民に選挙権が与えられるようになりました。現在の２年生の学生の一部も次の選挙に行くことが可能になりました。

さて、学生の皆さんは政治に関心を持っていますか？この本は「国民がバカになれば政治もバカになる」という事をネットスラングを交えて分かりやすく説いた本です。是非この本を読んで，政治についての知識・関心を深めていくきっかけとしてもらえたらと思います。

機械電子工学科4年　川口 大輝

# 教員〈読間〉

## 外国語学習成功者の研究 より良い外国語学習法を求めて

▶竹内 理〈松柏社〉

グローバル化した世界で生き抜くには共通語としての英語運用能力が重要である。この本は外国語を習得するためには何をするべきかを様々な角度から詳しく述べた第二言語習得研究の専門書である。有効な英語学習法を納得して学ぶことができる。学問に王道はない。常に努力を続け、自立的英語学習成功者となろう！

一般教育科教員　水野 知津子

## ブレイブ･ストーリー

▶宮部 みゆき〈角川書店〉

人気作家の有名な作品なので、既に他の先生が推薦しているかもしれませんが、この本を推薦します。あらすじは、ネットで検索すれば良いので省きます。代わりに、読むときのアドバイスをしておきます。前半は、あまり愉快な話ではないです。しかし、読み進めてください。後半になるほど、話に引き込まれます。面白いです。

通信ネットワーク工学科教員　正本 利行

## マーケット感覚を身につけよう 「これから何が売れるのか？」 わかる人になる5つの方法

▶ちきりん〈ダイヤモンド社〉

現代社会では誰であってもマーケットと無関係では居られません。それはサラリーマンだけでなく、学生であってもNPO法人に勤めていても、です。この本では、あらゆる商品やサービスの「価値」を正しく見いだすことが出来る「感覚」の重要性を説いており、人生の考え方の指針となり得るエッセンスが詰まっています。文章も例もわかりやすく書かれている良書です。

電子システム工学科教員　藤井 宏行

## ねこのばば

▶畠中 恵〈新潮社〉

病気がちな薬問屋の若旦那とそれを見守る妖怪たちとの、江戸を舞台にしたほのぼの推理短編集です。人型以外の妖怪たちは「夏目友人帳」のような、人の目には見えないがそこら中にいる愉快な存在でしょうか。このいつも寝込んでばかりいる若旦那がときどきホームズ並の推理力を働かせて事件を解決します。気楽に読めますよ。

情報工学科教員　河田 進